

特集論文

中世ユーラシア世界の中の南アジア  
—地政学的構造から見た帝国と交易ネットワーク

三田 昌彦\*

“South Asia in the Medieval Eurasian World: Empires and Trade Networks from a Geopolitical Viewpoint”

MITA Masahiko

Abstract

This paper discusses the historical process of South Asian state formation and the expansion of the maritime network in the Indian Ocean during the 10th to 14th centuries, demonstrating the relevance to the existing Eurasian geopolitical structure: activation of arid and semi-arid zones and linkage between those zones and sedentary agricultural zones.

The ecological changes known as the Medieval Climate Anomaly, namely warming and the activation of monsoons, promoted agricultural expansion and stimulated commercial activities in arid and semi-arid zones in South Asia. The economic activation of these zones motivated the people of the zones to construct regional states of Hindu kingdoms functioning as interfaces between the arid and semi-arid zones of newly developing areas and the sedentary agricultural zones of ancient advanced areas. Such economic and political situations stimulated nomad powers in Central Asia, who then invaded many parts of the vast agricultural zones in Eurasia, to enter and establish extensive empires in South Asia which also functioned as interfaces between the two zones. The interface functions of those states enabled smooth and direct overland connections between Central Asia and the port cities of South India through the arid and semi-arid corridors passing through the Deccan, MP, Rajasthan, and Punjab regions, and made a great contribution to the establishment of extensive overland and maritime Afro-Eurasian trade networks in the period of the Mongol Empire.

要旨

本稿は10 - 14世紀の南アジアの政治史的展開を、ユーラシア・レベルの乾燥・半乾燥地帯の

---

\* 名古屋大学大学院文学研究科助教

- ・ 2008、「施与勅書と王権—プラティールハール朝勅書様式に見えるサーマント体制」、『名古屋大学文学部研究論集』、161、21-43頁。
- ・ 2003, “Clan System or Sāmanta System?: The Polity of the Śākambharī Cāhamānas in Early Medieval Rajasthan,” *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, 15, pp. 1-38.

活性化とその定着農耕地帯との連結という、当時の地政学的構造の文脈の中で把握し、その動きがインド洋海域世界の発展と密接に関連して、当時のアフロ＝ユーラシア・レベルの交易と結びついていた、そのメカニズムを捉えようとするものである。生態環境の変動（温暖化と降雨量の安定化）による乾燥・半乾燥地帯の活性化は南アジアの地政学的構造を変化させ、その結果、それまでの定着農耕地帯中心の国家は、乾燥・半乾燥地帯と定着農耕地帯とのインターフェースとして機能する国家へと転換した。このような状況が、当時ユーラシア全域で活発化していた遊牧勢力による南アジアへの進出と帝国建設の必要条件となった。同時にそうした国家の出現は、中央ユーラシアとインド洋世界とをスムーズに連結することを可能とし、当時のアフロ＝ユーラシア規模の交易ネットワークの形成にも寄与していた。

## 1. はじめに

モンゴル帝国がユーラシアの大半を統合した13世紀が、アフロ＝ユーラシア世界全域において未曾有の交易の繁栄が見られた時代であったことは、すでに周知の事実であろう。南アジアではデリー・スルターン朝が拡大していく時代である。

近年、この時代の南アジアの動きを、ユーラシア・レベルのテュルク＝モンゴル系遊牧民の動きの中に位置づけようとする研究が現れてきた[Gommans 1998; Wink 1990; 1997; 2004]。その特質は、南アジア世界を閉じた世界と見るのではなく、生態的に連続した西アジア・中央アジアからデカンに至る乾燥帯——それは移動する遊牧民にとっても連続した地域とされる——の存在を強調し、西暦1000年以降のテュルク＝モンゴル系遊牧諸勢力の定着農耕地帯への進出の一局面として、インドにおけるムスリム政権の成立・拡大を把握するところにある。

本稿はこの視角に多くを学びつつ、遊牧勢力の侵入を含む10世紀から14世紀に至るインドの政治史的展開を、ユーラシア・レベルの乾燥・半乾燥地帯の活性化と定着農耕地帯との連結の中で把握し、その動きがインド洋海域世界の発展と密接に関連して、当時のアフロ＝ユーラシア・レベルの交易の繁栄と結びついていた様子を素描することを目的とする。その際、強調してみたい点は、これらの動きを一定程度規定する中央アジアから南アジアに至る生態的・地政学的構造<sup>1)</sup>が、これらの動きが始まる西暦1000年前後あるいはそれより少し前から、気候変動などにより変化する点である。アフロ＝ユーラシア世界の歴史的展開を探ろうとするインド洋交易論は、たとえばK・N・チョードリーのように各地域の生態的な特質を所与の前提として、地域間の交易・相互交流の歴史を捉えようとする傾向が強いが[Chaudhuri 1990]、本稿は、そうした生態環境が変動することで地政学的な構造が変化することに注目し、それによって地域間交流が促進され、この時代のアフロ＝ユーラシア・レベルの交流・交易が展開したとする立場をとる。そこで以下では、まず当時の南アジア諸勢力の動きを規定した地政学的構造の変化——乾燥・半乾燥地帯の活性化——を基点に、その帝国形成の展開を素描し、その後インド洋海域世界の発展と交易ネットワークの拡大を、地政学的構造の変化と関連させて把握する、という構成をとる。

言うまでもなく、本稿は様々な先行研究、すなわち二次文献に多く依存する上に、随所で推測を交えた議論を展開せざるを得ず、各方面の専門家にご批正いただかねばならない仮説にすぎない。あくまで今後の実証研究や他地域との比較研究の足がかりとして提示するものである。

本論に入る前に、南アジア世界の生態的特質を本稿の関心に沿って大づかみに見ておきたい。南アジアでは、乾燥ないし半乾燥地帯が北西インドからラージャスターン、デカンへと続き、ガンジス川流域に沿って下流に行くほど湿潤になっていく。湿潤なガンジス川流域は稲作を主穀とし、人口収容力が極めて高く、古代よりインド世界では最も人口密度の高い定着農耕地域であった。本稿で半乾燥地帯とした地域は年間降水量 1,000 ミリ程度まで含まれているが、雨期にほとんどが降ってしまうため、長い乾期はきわめて乾燥することになり水稻作などは期待できない。こうした半乾燥地帯では様々な雑穀が栽培されるが、人口収容力は低い。一般に農耕だけでは家計が成立せず、牧畜の比重が高くなる。とくに中世には農閑期に傭兵や行商、その他の出稼ぎをする者が多く、牛やラクダなど牧畜経験と関連して隊商や輸送業者などを輩出していた。総じて、戦士や商人、牧人、輸送業者（バンジャラなど）等、概ね移動を事とする人々が多く住む地域である。こうした乾燥・半乾燥地域は南アジアだけにとどまらず、北西インドを通して中央アジア・西アジア世界にまで連続していた。この点は極めて重要であり、中央アジア・西アジアを通るオアシスの道が分岐して、北西インドからデカンを貫く乾燥移動民地帯の回廊を經由して、インド洋交易の一大中継地域であるインド沿岸諸港に接続しており、海路の大動脈と陸路の大動脈を結びつける役割を、南アジアの乾燥・半乾燥地帯が担っていた。以下に述べていくように、中世アフロ＝ユーラシア交易が繁栄する 11～14 世紀には、とくにこの地域の地政学的重要性が高まることになる。

## 2. 遊牧勢力による帝国建設——中央アジアとの地政学的連続と不連続

西暦 1000 年前後、南アジア世界の勢力図は様々な変化を見せることになるが、そのうちの 하나가 テュルク＝イスラーム勢力の侵入である。ガズナ朝マフムードは、カナウジをはじめ、北インドの各地に侵攻し、さらにその後、シヴァ信仰の聖地として名高いグジャラートのソームナートを破壊・掠奪したことが、バルシア語史書に記されている。そこでは後者の掠奪が偶像破壊の「善行」とされていることもあり、これまでこの侵入は、一般にイスラーム勢力の侵攻として位置づけられてきた。しかし近年、史書の記述をそのまま鵜呑みにすることが問題視され、その掠奪はイスラーム信仰の表れというよりも遊牧国家の特質として位置づけられることが多い [Eaton 2002; Thapar 2004]。そして、これを遊牧勢力の動きとして考えると、この侵攻からデリー・スルターン朝の成立までの過程は、ユーラシア規模で起こった各地の遊牧勢力の帝国形成と比較する意味が出てくる。

南アジア史ではホマンズやウィンクらによって、また日本では中央アジア史の森安孝夫らによって、西暦 1000 年前後から中央ユーラシアの遊牧勢力の動きが以前にも増して活発化し、定着農耕地帯への進出がさかんになってくることが指摘されている [Gommans 1998; Wink 1990; 1997; 2004; 森安

2007: 306-310]。具体的事例としては、キタイ帝国(遼)、金、モンゴル帝国、セルジューク朝、ホラズム・シャー朝、ガズナ朝、ゴール朝などである。これらの帝国の共通しているところは、彼らの故地である乾燥遊牧地域とそれに近接する定着農耕地帯とを取り込むような広大な陸域を統合している点であり、その両者の統合上の必要からしばしば両者の境域にあたる地点が首都として選択されている(北京、バグダード、ラーホール、デリーなど)。

一般にそれ以前の遊牧国家の定着農耕地帯への進出は、統治を目的としない場合には掠奪後にそのまま全勢力を撤退させてしまい、統治が目的となった場合には遊牧国家の独自性を捨てて、定着農耕地帯の政治文化に完全に同化してしまったようである。これは、旧来の定着農耕地帯の帝国システムが農民への租税徴収に基盤を置いた官僚制による統治であったのに対して、遊牧国家は移動民の部族を基盤とした族長同士の連合体であり、帝国システムが根本的に異なっていたからであろう。ところが長く定着農耕地帯との交流を続けるうちに、官僚制や文書行政、税制などの統治のノウハウを身につけたり、あるいはそのノウハウを知る農耕地帯の官僚を配下に従える手法が慣行化するようになるなど、遊牧勢力は農耕地帯の統治システムを徐々に吸収していった[森安 2007: 308-310]。キタイ帝国に見るような遊牧地帯と農耕地帯の統治法を併存させる二重統治体制や、テュルク系遊牧国家やモンゴル帝国に見られるような、軍事はテュルク・モンゴル系、行政はペルシア系や漢族といった分業体制はその好例である。これによって帝国は定着農耕地帯と内陸ルートを抱える乾燥遊牧地帯とを一つの政治的統合体によって連結し、それ以前にも増して内陸遠隔地交易を発展させ両地域の交流・融合を進展させることになるのである。

南アジア世界におけるこうした動きはいずれもテュルク系勢力が主体であり、その最初はガズナ朝である。アフガニスタンのガズニに拠点を置くガズナ朝は、10世紀末には定着農耕地帯であるパンジャブを支配下に入れ、11世紀初頭マフムードのときには、西はカスピ海南岸にまで広がる巨大な帝国を打ち立てた。マフムードのときにガンジス川流域にまで侵攻するが、統治を目的としたものではなく掠奪を主目的とするものであった。王朝にとって税収の面から重要であった中央アジアのホラーサーン地方はガズナ朝の軍備増強の柱であり、そこでの徴税によって軍備を整えてインドへの遠征を行い、その掠奪品が参加者に分配され、スルターンは遠征の収益を元手にホラーサーン地方の徴税を行うという循環構造ができあがっていた[稲葉 2007: 76]。こうしたことが構造化していたということは、ガズナ朝の軍事力もその基盤となるホラーサーン地方の確保も、インド遠征の掠奪が支えていたということになるであろう[Eaton 2002: 250-251]<sup>2)</sup>。ガズナ朝の南アジアの領域はパンジャブに限られるとはいえ、その経済はガズニやパンジャブを拠点に広く北インドにまで広がるものであったとすべきである。

しかし、12世紀後半アフガニスタンから興ったゴール朝はガズナ朝とは異なり、本格的にインドの穀倉地帯ガンジス川流域の統治を目指して侵攻し、そしてインド方面軍の拠点をデリーに置いた。デリー占拠を実現させた直接的な契機であるチャーハマナ朝との戦い(第二次タラーインの戦い)

をはじめ、北インドの諸王朝との戦闘に次々と勝利して北インドの覇権を握ることに成功するが、これら戦闘の直接的な勝因として考えられているのが、当時の戦闘で極めて重要であった軍用馬の供給である。第3章にて詳述するが、南アジアは北西インドを除き大型の軍用馬の飼育には不適であり、しばしば中央アジアや西アジアからの輸入に依存していたが、この頃はまだ海路による馬の供給は一般的ではなく、北西辺境の陸路による供給が主流であった。この供給経路を確保しながらゴール朝は北インドに侵攻してきたのであり、インド在来の諸王朝は逆にその経路を断たれることになったと考えられる [Digby 1971]。中央アジア、西アジアとの連結が北インドにおける軍事的優位を保証していたのである。

1206年、ゴール朝のインド方面軍司令官のクトゥブッディーン・アイベグがデリーで独立して奴隷王朝を成立させたが、その北インド支配の確立は次の王イレトゥトゥミシュの時であり、これもまた多分に中央アジア・西アジアの動向と密接に結びついていた。当初、奴隷王朝はゴール朝の有力勢力ユルドゥズやクバーチャに北西方面を脅かされていたが、イレトゥトゥミシュの時に中央アジアのホラズム・シャーの侵攻によってこれらライバル勢力が弱体化した。またイレトゥトゥミシュは、アッバース朝カリフと外交関係を開いてスルターンとしての認証状を獲得している。加えて彼の組織していた軍事力の主力は、13世紀前半に進出してきたモンゴル勢力に押し出されて奴隷として購入されたテュルク人であった [真下 2007: 105-106]。

こうして勢力を固めた奴隷王朝は北インドの軍事的統合を進めていき、穀倉地帯とインダス下流の港湾都市および北西インドを、広大な乾燥・半乾燥地帯を通る陸路で連結する帝国を打ち立てた。以後北インドを統合するスルターン国家(デリー・スルターン朝)は、ガンジス川流域の穀倉地帯の西端であると同時に、中央アジア・西アジア方面へとつながる乾燥・半乾燥地帯の東端に位置する、いわば両者の境界地帯に位置するデリーを長く拠点とすることになる。

ガズナ朝、ゴール朝、奴隷王朝のいずれも、その征服活動の主体はマムルークや遊牧貴族などテュルク系の人々であったが、すでにガズナ朝のときにはペルシア語が公用語化され、テュルク系の人々のペルシア語化が進んでいた。そのためサーサーン朝以来の西アジアの官僚制や10世紀以降のイクター制などペルシア=イスラーム的な統治システムが、これ以降インドのムスリム国家の伝統となるとともに、ペルシア文化とペルシア人知識人の流入が増大していくことになる [Wink 1990: 21-22]。こうして南アジア世界でも、定着農耕地帯(ここでは西アジア)の統治システムのノウハウがテュルク系遊牧国家によって吸収され、インド統治に利用されていったと言える。

このことの画期性は、それ以前の遊牧勢力の南アジアへの侵入と比較すれば明らかである。遊牧勢力が南アジアに入ってくるルートは基本的に北西インドであるが、その方面からの遊牧勢力の侵入は古くはアーリヤ人の侵入にまで遡り、その後、サカ人(西クシャトラパ朝)、クシャーナ朝、エフタル(フーナ)、グルジャラ族など一部の「ラージプート」等々、常に遊牧勢力が侵入しては王国を打ち立ててきた。しかしこれらの勢力は、サンスクリット文化が宮廷文化として定着するグプタ

朝以降は、いずれもインド＝サンスクリット文化に同化することで国家建設を成功させるか<sup>3)</sup>、撤退するかであったが、11世紀ガズナ朝以降は、サンスクリット文化に同化することなく、ペルシア＝イスラーム文化を携えて、それまでのインドには存在しなかったタイプの帝国建設を行っていった。その意味では、他のユーラシア地域の遊牧国家の場合と同様、遊牧勢力側の帝国文化の成長として評価できるであろう<sup>4)</sup>。

このように、テュルク＝イスラーム勢力の南アジアへの進出・定着のプロセスは、同時代ユーラシアの境域地域で起こっていた動きと本質的に同一の動きであったと言える。しかし他方で、この時代の南アジア世界の帝国には他の地域のそれとは異なる特質もまた見られる。ガンジス川流域の穀倉地帯と中央アジアとを直接統合する帝国はゴール朝の場合を除くと存在せず、その場合でも極めて短期間にしか実現しなかった。そうしたタイプの帝国はこの頃の南アジア世界では不安定であったと言えるかもしれない。ガズナ朝などアフガニスタン方面に拠点を置く勢力はパンジャーブ～インダス川流域を領域の東端としており、他方デリーに本拠を置いたデリー・スルターン朝などは、モンゴル帝国やティムール帝国に阻まれてほぼ完全に南アジア世界の帝国にとどまった。つまり、地理的には一般に南アジアとされるパンジャーブは、当時の南アジアと中央アジアの諸勢力にとって、地政学的に両地域の境域に位置していたことになる。にもかかわらず、この地が巨大な帝国勢力の首都になることがほとんどなかったのは、現実には両地域に跨がる勢力が安定的には存在しなかったからであろう<sup>5)</sup>。アフガニスタンにまで及ぶ北インドの帝国はムガル朝を待たねばならない。この時代の南アジアでは、定着農耕地帯と乾燥・半乾燥牧畜地帯との政治的連結は、南アジア内部において安定的に実現していたのである。

南アジアのいったい何が他地域と異なるのか。一つの回答をウインクの見解に見ることができるのかもしれない。デリー・スルターン朝やムガル朝を中央ユーラシアの国家と同一の性格と見るホマンズとは異なり、彼はインドに侵入したテュルク＝イスラーム勢力の遊牧的性格を否定する<sup>6)</sup>。元来遊牧民であった彼らは、広域の遊牧に不向きなモンスーン・インドに入ってくると、遊牧生活から離脱する。デリー・スルターン朝の支配層を支えたマムルークはすでに遊牧生活とは無縁な軍人であるし、その頃に南アジアに入ってくる中央アジア移民のほとんどは部族単位ではなく、家畜の群れを捨てて入ってくる諸個人か軍人ばかりであった[Wink 2004: 125-126, 151-154, 164-165]。定住地帯へのこうした侵入の仕方は、テュルク＝モンゴル系の人々が遊牧生活を維持しつつ軍事的な支配層を構成したイランやその他の地域とは大きく異なる<sup>7)</sup>。後述する馬の輸入の問題とも関連して、ウインクの理解は重要であろう。このような南アジアの生態的特質に発するインド＝ムスリム国家の脱遊牧的性格は、モンゴルやティムールをはじめ、中央アジアに本拠を置く帝国が南アジア世界、とりわけ東の穀倉地帯を安定的に統治できない理由として、また逆に南アジア側に本拠を置いた帝国が中央アジアを安定的に統治できない理由としても理解できよう。



### 3. 南アジア世界の地域国家建設——もう一つの境域国家形成

南アジアにおける定着農耕地帯と乾燥・半乾燥牧畜地帯との政治的連結は、もう一つ別の次元の国家統合を生み出していた。10世紀後半頃から明確化する、辺境における開発と辺境からの地域国家形成である。

パーラ朝、プラティーハーラ朝、ラーシュトラクータ朝の3帝国は、10世紀半ばになると衰退・瓦解の傾向が顕著になってくる。それまでそれぞれの王朝の従属王権(サーマンタ)であった勢力が独立を開始するのである。11世紀初頭までに幾つもの王権が独立し、北インドの多くの地域では12世紀末ないし13世紀初頭まで、その他の地域ではデリーのハルジー朝・トゥグルク朝による遠征の13世紀末ないし14世紀初頭まで、地域政権として地域国家の建設を進めた。この時代の地域国家の特質の一つは、パーラ朝、プラティーハーラ朝、あるいはそれ以前の多くの国家のように定着農耕地帯に王都を置くのではなく、ヤーダヴァ朝のデーヴァギリ、パラマラ朝のダール、チャンデーラ朝のマホーバーヤカジュラーホー、チャーハマーナ朝のアジュメールやデリーなど、乾燥・半乾燥地帯あるいはそれと定着農耕地帯との境界点に首都などの拠点を置いた国家が多いことである。こうした地域は、古代にはサンスクリット文化も及んでいなかったところが多く、7・8世紀から数世紀かけて、この地の新興豪族がガンジス川流域からバラモンを招聘して、これらの地を徐々にヒンドゥー化しヴァルナ秩序を波及させ、農村の開発や都市の建設を進めてきていた。この過程で乾燥・半乾燥地帯の勢力は、古来から発展してきたサンスクリット文化を通して、定着農耕地帯の王制国家システムのノウハウを吸収し、同時代の遊牧勢力と同様の政治的支配の飛躍を果たすのである<sup>8)</sup>。

そしてこれら地域政権が自立化する10ないし11世紀以降、その開発の進行が加速する傾向が見られる。とくにラージャスターンやグジャラートなど乾燥・半乾燥地帯において井戸・貯水池建設を記す刻文の数が明らかに増え[Jain 1990: 25-34; Chattopadhyaya 1990: 70-92; 1994: 38-56]、その傾向が13世紀末まで続く。農業開発にともなって村落数が増えてくるとそれらの村落をまとめる小都市も増え、王都や城塞都市、宗教センター、港市などの都市だけでなく、パーランブルなど域内交易と遠隔地交易の中継センターとなる内陸の商業都市も繁栄していった<sup>9)</sup>。

また開発と同時に地域王権によって領域内の交通ネットワークの整備や治安維持も図られた。たとえばグジャラートは、プラティーハーラ朝支配下には幾つものサーマンタで分断され、カーティアーワール半島沿岸部は海賊が跋扈することで有名であったが、12世紀チャウルキヤ朝ジャヤシンハの時代には、この半島南部の土着勢力チューダーサマー族が討伐され、グジャラート全域が統合された。その際、首都アナヒラパータカ(アンヒルワール)とチューダーサマー族の王都であったジュナーガルを結ぶ軍用道路が整備され、征服後は沿岸部まで結ぶ幹線路となっている[Jain 1990: 43]<sup>10)</sup>。

こうした傾向は、後述するこの時代の陸海のアフロ＝ユーラシア交易の繁栄と関係しているのは言うまでもないが、乾燥・半乾燥地帯の灌漑施設の増加や開墾は、この時代の気候状況とも密接に関係していると考えられる。いわゆる中世温暖期であり、9世紀後半頃から13世紀末までは前代よ

りも温暖であったとされている。これによってヨーロッパでは大陸部において作期が拡大し、重輪犁の使用や三圃式輪作など農業上の画期的な発展も見られ、開墾地が一気に拡大した[フェイガン 2008: 50-56, 60-66; 田家 2010: 171-172]。他方、湿潤なヨーロッパとは異なり、元来乾燥していたユーラシア、アフリカ、北米大陸の内陸部では、温度上昇によって乾燥が高まり、旱魃が多発する地域も少なくなかった[フェイガン 2008: 43, 76-100, etc.; 田家 2010: 175]。

ところがこの時期は同時に、モンスーンの不安定要因であるエルニーニョ現象がほとんど発生しなかった時代でもある。インド洋世界ではモンスーンが活発化・安定化して農業に好状況をもたらしており、たとえば中国南部や東南アジアの稲の作柄は極めて良好になったようである[Lieberman 2003: 104-106, etc.; 2009: 554-556, 687; フェイガン 2008: 219-220]。南アジアも同様であり、たとえば乾燥地帯であるラージャスターンのピーカーネール、ジョードプルでは、1000年から1200年は前代と比べて降水量が増大し、しかも安定していた[Bryson and Swain 1981: 140, Fig. 2]<sup>11)</sup>。温度上昇時での降水量の増大は地表水の蒸発を伴うので、温暖化のもとでは天水農耕においてどれほど有利であったかは一概に言えないが、蒸発のあまりない地下水に関しては、その増大は十分に見込めよう。これがすでに述べた乾燥・半乾燥地帯での井戸灌漑の急増と関わっていると推察する。

したがってこの時代の開発は、天水農耕地帯の拡大もあつたであろうが、それ以上に乾燥地での灌漑農業の拡大が最も大きな意味をもつたものと思われる。これは乾燥・半乾燥地帯の農業・牧畜・商業活動を活発化させ、定着農耕地帯との境界域に拠点を設ける国家建設を促したと言えよう。

言うまでもなく境界地域での国家建設と両地域の政治的統合は、活発化してきた乾燥・半乾燥地帯の経済活動を、古くからの経済的中心であった諸地域と結びつけて、交易と人的交流を高める結果になった。すでに述べた遊牧勢力の南アジア進出に伴って、騎馬と牧畜民の軍事力の重要性が以前にも増して認識されるようになると、このような境域世界での交易・交流の進展は、乾燥・半乾燥地帯の移動牧畜民の軍事力(弓術など)の利用を一般化させ、同時にバンジャラなど、ラクダや牛による隊商の輸送力といった同地域の交易ネットワークへの依存も高めていくことになった。辛島昇の研究によれば、南インドでも11世紀頃から山岳部族民の活動が活発化し、チョーラ朝の軍事遠征も彼らの弓術を多く利用していたことが明らかにされている[Karashima 2009: 15-16, 74]。グジャラートでは、カッチヤカーティアール半島の戦士牧畜民の移動・定着が、チャウルキヤ朝やグジャラート王国との協力関係の中で促進されていることが指摘されている[Sheikh 2010]。こうしたインド各地の山岳部族民や牧人の動きも、上記の気候状況に伴う非定着農耕地帯における経済活動の活発化と密接に関わっていると考えられる。

さて、これら新興の地域国家はどのようにして異なる生態環境の諸地域を統治していたのであろうか。この時代の南アジアの地域国家は、王の権力が社会の末端にまで直接及ぶような官僚制国家ではなく、大小さまざまな領域を持つ土着勢力を従属王権(サーマンタ)として支配下に入れ、政治的・経済的な要衝は直轄化することがあったとはいえ、多くの場合、彼らの在地における統治シス



テムをそのまま温存させる、いわゆるサーマンタ体制をとっていた[三田 2007b: 46-48]<sup>12)</sup>。また商業都市についてはある程度の自治権を商人たちのギルドや都市自治組織に任せ[三田 2007b: 52-54]、王自らが商業活動を行うというようなことは基本的にはなかったと思われる。様々な出自の人々を王直属の家臣として配下に抱えて適所適材で利用する、前述の分業的統治の側面も存在したが、様々な在地勢力の連合体(サーマンタ体制)という意味では、領域単位で統治システムを変えるキタイ帝国の二重統治体制と通ずるものがあると言えないであろうか<sup>13)</sup>。

そうした点で興味深いのは、ゴアのカダンバ朝の沿岸部統治の手法である。第4章でも述べるように、ゴアのカダンバ朝が成立する10世紀後半以降は、コンカンからマラバールの港市が繁栄し、多くのムスリム商人が拠点を確保していた。同王朝はゴアを重要な拠点としながらも、直接強力な統制下に置くのではなく、信頼のおける港市の勢力に任せていたようである。アラブ人ムスリムの大商人アリーは難破船に乗っていた王太子を救出し、おそらくそうした理由もあって、その孫サーダナがゴア一帯の統治を任された[Chakravarti 2000: 43]。サーマンタ体制による現地勢力への委任統治のシステムは、統治者がそこの代々の土着支配者である必要は必ずしもなく、港市であることを考慮して海域勢力が選択されることもあったのである。ここにも生態環境の異なる地域へのインディ的な対応を見ることができるであろう。

#### 4. モンゴル帝国によるユーラシア統合とデリー・スルターン朝

13世紀初頭から後半にかけてのモンゴル帝国の拡大とユーラシア大陸の大部分の政治的統合は、すでに述べた、中央ユーラシアの遊牧勢力による定着農耕地帯の統合の動きの延長上の出来事であったと見ることができる。たいていは一つの農耕地帯を取り込むにすぎないそれまでの遊牧勢力とは異なり、モンゴル帝国は、ユーラシア大陸の周辺に広がる幾つもの異なる文化圏の定着農耕地帯を支配下におさめていた。経済・財務官僚にアラブ系・イラン系ムスリムを登用するなど全帝国規模で上述の分業体制をとるとともに、高麗やチベット、ノヴゴロド公国、モスクワ公国など、周辺地域には領域単位で現地に適合的な統治体制を認める柔軟な帝国システムをも併せ持っていた。この両システムの併用が、多様な文化圏で構成される広大な領域の統合を実現させていたと言えよう。

すでに多く論じられているように、その結果、中国南部やイラン・イラクなどの港湾都市を自己の支配下におさめ、オアシスの道をはじめとする内陸幹線ルートとインド洋交易の東西の拠点が一つの帝国秩序のもとに置かれることになり、それまではあり得なかったほどの円滑な交易とそれによる取引量の増大をもたらした。たとえば、幹線路の駅伝制の整備はもちろん、それまで所要所で課されていた通行税が撤廃され、最終売却地で一律30分の1の売上税だけ払えばよくなるなど、統合されなければ実現不可能な交易振興策が実施された[杉山 1997: 166-168]。また帝国貴族は、主にイラン系ムスリム商人やウィグル商人をオルトクと称する特権御用商人として採用し、銀錠などによる資金を提供して優先的に交易にあたらせた[四日市 2008: 125-127]。こうした諸策が当時のア

フロ＝ユーラシア規模の交易の活況傾向をさらに押し進めることになったのである。

このモンゴル帝国と南アジア世界のデリー・スルターン朝との関わりとしては、北西防備の必要と南インド遠征、馬の入手経路の確保とグジャラート遠征、馬交易などが考えられる。

デリー・スルターン朝は奴隸王朝からハルジー朝、トゥグルク朝まで、常にモンゴル帝国チャガタイ＝ハン国の攻勢を受けていた。一時デリーにモンゴル軍が迫ることがあったとはいえ、結局はモンゴル帝国による征服は免れたが、モンゴルのインド侵攻が激しくなってくる13世紀末は、デリーの政権となったハルジー朝は北西防備の必要に迫られることになった。ハルジー朝はグジャラートを攻略し、さらに南インドにまで遠征を企てるが、その方面には統治組織を整備することなく軍を引き上げている。それは北西防備の財政上の必要から企てられた掠奪ではないかと考える研究者もいる[Eaton 2002: 257]。また、ハルジー朝のグジャラート遠征は、征服後、総督をデリーから派遣してアンヒルワールを拠点に直接統治することになったが、その理由の一つに、西インドの交易拠点を奪取するという意図があったであろう。その際、注意すべきは軍用馬入手の問題である。

南アジアはカッチなど良馬を産する地域もあるが、モンスーン気候で基本的には広大な草原を欠き、大型馬を遊牧できる条件にある地域はほとんどない。この世界の遊牧の中心は小型の羊や山羊などで移動範囲も小さい。結局インド産の馬のほとんどは小型のもので、軍用馬、とりわけ重装騎兵用の強力な大型軍馬は、多くの場合、中央アジアやアラブ世界に依存せざるを得なかった[Digby 1971: 25-28]。モンゴル勢力がインド北西部に対峙したからといって、必ずしも北西方面からの馬の供給が途絶えたわけではないが[Digby 1971: 34]、安定的に供給するにはやはり海路が得策であったろう。グジャラート諸港はその窓口になっていたのである[家島 2006: 579]。デカンにまでデリー政権の侵攻が進む13世紀末ないし14世紀以降は、デカンや南インドの諸王国の軍馬の需要が高まり、コンカン地方の諸港も馬交易の窓口になっていく。

この馬交易のもつ歴史上の意味は南アジア世界に限られるものではない。11世紀以来、西アジアを中心に南アジアも含めて、ユーラシア西部では銀不足の状態が続いていたが、それが13世紀になって解消されたことが知られている。その要因は中国を征服したモンゴルが、中国の銀を銀錠の形でユーラシア全域に流通させたことだとされているが、その銀は直接西アジアにもたらされたのではなく、インドを媒介としていた可能性が高い。すなわち、中国への十分な国際商品があるわけではない中央アジア・西アジアが中国の銀を入手するには、中国への国際商品を有する他の地域を媒介するしかなく、それが西アジア・中央アジア産の軍馬の需要が高いインドであったということである[四日市 2008: 139-141]<sup>14)</sup>。他方インドは木綿など他地域向けの国産商品には事欠かなかったため、銀が流入する状況にはあったはずである<sup>15)</sup>。かくしてモンゴル帝国のユーラシア統合は、交易の発展とともにインドの海路による馬の輸入を促進し、それがアフロ＝ユーラシア全域の銀の循環を潤滑にしていたわけである。

トゥグルク朝になると、再びデカン以南への遠征が始まるが、今度は掠奪を目的としたハルジー

朝の遠征とは異なり、征服地から地租を確保するために徴税官が配置される、統治を目的とした遠征であった。北西方面も第2代ムハンマドの時代にはインダス川流域全域が支配下に入り、デリー・スルターン朝は南アジア世界の大部分をその支配下に入れた。その結果、この時代にはとくに南インドとの交通ネットワークが発展し、駅伝制(バリード)を拡張したり[Wink 2004: 131]<sup>16)</sup>、北インドと南インドとのリンクにおいて戦略的に有利なデーヴァギリにダウラターバードを建設し、そこに遷都しようとした。また中央アジアへの遠征を企て、そのために穀倉地帯のガンジス=ヤムナー川流域に重税をかけたらしめている。結局計画倒れではあったのだが、この時代の南アジアの政権でヒンドゥークシュを超えて拡大しようとしたのは、この王朝だけである[真下 2007: 115, 143]。トゥグルク帝国の地政学的な関心は、あたかも中央アジアからデカンを抜けて南インドに至る半乾燥地帯の回廊の確保にあったかのようであった。

トゥグルク朝による南アジア統合は、それが短期間であったとはいえ、画期的であった。地域王権が割拠していた13世紀以前には、内陸路の場合、外来商人はその地域の王に贈り物を納めるなどして通行許可状(*desottāra*)を発給してもらい、特定領域内での自由な商売や安全な通行、商業税(*śulka*)<sup>17)</sup>の免除などを保証されていたので[Jain 1990: 36-37]<sup>18)</sup>、通行許可状さえ発給してもらえば交易活動に大きな支障があったわけではなかった。しかし、13世紀末以降急速に進んだデリー・スルターン朝の征服活動によって、そうした地域勢力への許可状の申請の必要さえもなくなったとすれば、トゥグルク帝国期の南アジアは、モンゴル帝国と同様、かつてないほどの円滑な内陸交易が展開したと推測できよう。トゥグルク朝の南アジア統合によって円滑化した半乾燥地帯の内陸ルートは、西アジア・中央アジアから南アジアの穀倉地帯と沿岸港市を結びつける大動脈であり、すでに述べたモンゴル帝国時代のアフロ=ユーラシア交易における銀流通の重要な一局面を構成していたわけである。

## 5. 交易ネットワークと中世国家

### 5-1. 海域世界と交易ネットワーク

以下では、南アジアを超えたインド洋海域世界の交易ネットワークの発展、および商人のネットワークと王朝政府との関係について論及する中で、これらの問題とこの時代の地政学的構造との連関を探っていく。インド洋交易や港市については近年さかんに研究が行われ、文明圏を超えて共通の文化を保持する海域世界の存在も明らかになってきているので、まずそれらに沿ってインド洋世界の交易ネットワークを概観しよう。

イスラーム勃興後の7ないし8世紀以降、唐を中心とした東シナ海・南シナ海交易に、バルシア湾沿岸のシーラーフ商人をはじめイラン系ムスリム商人が参入し、長安・広州とバグダードを東西の中心としてインド洋交易がさかんにってくる過程で、南アジア沿岸部にもアラブ系・イラン系ムスリム商人の拠点が設けられるようになる。その後、古くからの南アジアの交易の中心であるグ

ジャラートでは、10ないし11世紀頃から明らかに交易活動が活発化し[Jain 1990]、それまで以上に多くのアラブ・イラン商人が来港するようになった。また10世紀に、シーラーフー帯を襲った大地震やペルシア湾岸の政情不安が大きな要因となって、それまでの中心地であったバグダードとペルシア湾ルートの重要性が一時的に後退し、相対的にエジプトのカイロの政治的経済的重要性が高まって紅海ルートの交易がさかんになると、インド洋交易の中継点およびインド物産の出荷港として南インド沿岸部の重要性が高まり、インド洋各地からムスリム商人、さらには中国商人もさかんに来航するようになった[家島 2006: 101-103]。とくに紅海においてマムルーク朝の庇護のもと、香辛料貿易を独占していたカーリミー商人は、13世紀にはおそらくカーリクトのサムドリ・ラージャの勢力拡大に手を貸し、インド洋交易の一大中継点に発展したカーリクトにおいて、有利な立場で香辛料取引を行うことに成功したという[Wink 1997: 276]<sup>19)</sup>。このように南アジア沿岸部の中核的な港市には必ずと言ってよいほど、インド洋交易を行うムスリム商人が季節的に滞在するようになっていたのである。

他方で、非ムスリムの土着の商人は、後代にスマトラから東アフリカまで進出していたグジャラートのジャイナ商人でさえも、13世紀までは主には南アジア沿岸部の交易や内陸交易を担っており、インド洋世界各地の主要港市に拠点を設けて地域間交易を担っていたムスリム商人や中国商人とは、大まかな分業関係が成立していたようである[Wink 1997: 274]<sup>20)</sup>。

しかし、11世紀以降の交易ネットワークの特質は、単にムスリム商人がインド洋交易を行っていた点ではなく、むしろ一つの海域世界を形づくっていった点にこそあると言うべきであろう。ムスリム商人がインド洋各地に拠点を設けることでインド洋沿岸部のイスラーム化が進行し、南アジア沿岸部が、東アフリカ、アラビア半島、イランの沿岸部と似たような世界へと転換していくのである。

東アフリカ沿岸部は、10世紀には内陸部の金の積出港としてイスラーム世界に知られていたが、その後、ムガディシュ、キルワなどの港市が金の積出港としてアラブ・イラン商人に注目され、11～13世紀に彼らの来港が頻繁になると、現地人との混血が進むなかでイスラーム化が進行し、スワヒリ都市が形成されていった[Wink 2004: 180-182; 家島 1991: 302-303; 富永 2008: 19-32]。南アジア沿岸部の港市も同様の変化をたどる。グジャラートでもやはり同じ頃から、ホージャヤやボーラーと称するイスマール派のムスリム商人が目立つようになる。彼らの多くはグジャラートを拠点とする商人であり、主には現地人の改宗によって増加していったとされている。マラバルの港市ではマーピラと称する現地人ムスリム商人が増大するが、彼らの多くはイラン系・アラブ系ムスリム商人と現地人との混血だと考えられている[辛島(編) 2004: 194-195]。

彼らの間に共通に見られる交易上の利点は、ムスリムでありつつ現地のローカルな交易ネットワークを保持していたことにある。スワヒリ商人は内陸部の金や奴隷、象牙を、ボーラー、ホージャヤは現地の非ムスリム商人とのコネクションを通して西インド内陸部の木綿、染料などを、マーピラは後背地で産する香辛料や米を、それぞれ遠隔地からやって来る商人——インド洋各地からのムス

リム商人、中国商人、ユダヤ商人、グジャラート商人（この頃は主に南アジア内部の地域間交易）など——に売り渡し、代わりに彼らから海外産の商品——アラビア・イラン方面からの馬、東南アジア産の香辛料、中国の陶磁器、貴金属、乳香など——を引き受けて、内陸部に流したり他の海外商人に売り渡したりと、海域世界と陸域世界との境界に位置する中継者として活躍していた。

このような現地人の混血・改宗ムスリムの仲介が、インド洋交易の円滑な取引に極めて重要な意味を持ったのは疑いないが、とはいえ彼らを介さないと交易が成り立たなかったというわけではない。13世紀、グジャラートのシヴァ派の聖地にして港市でもあるソームナートでは、ホルムズの商人 (*khojā*)・船主 (*navittaka*) のフィーローズ<sup>21)</sup> が季節的に来航し、現地のヒンドゥーの有力者 (*brhatpuruṣa rāja[kula]*) と交友関係を保持しつつ、彼らからソームナートの寺領地の一部を受け取り、彼らの支持のもと、そこにモスクを建設している<sup>22)</sup>。すでになかなかな程度イスラーム商人の来航が常態化していた13世紀には、現地人ムスリムを仲介することなく、直接ヒンドゥー商人とも交易ネットワークを築いていた海外ムスリム商人も存在していたのである。

このように、イスラーム化の早かったアラビア半島からイランにかけての地域を除くアラビア海沿岸部各地では、11世紀以降、混血および改宗による現地ムスリムの増大を通して、陸域圏内部深くに交易ネットワークが達し、さらに海域世界の交易ネットワークを通して陸域圏相互の交易上の連関性がより緊密化していく——それは海外ムスリム商人と現地人非ムスリム商人との直接的な取引をも可能にしていく——というプロセスが、同時に進行していったと言えるであろう。それは従来言われていたような海域世界だけの問題ではなく、同じ頃起こっていた乾燥・半乾燥地帯の政治勢力の活発化と定着農耕地帯との統合、それを支える内陸ルートの整備とキャラバン交易の活発化といった動きと関連づけて理解する必要のある現象である。モンゴル帝国のユーラシア統合をピークに活発化するアフロ＝ユーラシア交易は、モンゴルによってなされたのではなく、それ以前からの上記のような一連の動きの一つの到達点として理解すべきものであろう。その意味では遠隔地交易の活発化は、モンゴル帝国とは無関係な地域にまで及ぶのは当然であるし、単にインド洋交易の活発化だけでなく、なお遠隔地交易と密接に関わる取引に限定されるとはいえ、半乾燥地帯の開発、地域国家形成と連動してそれまで以上に内陸部深くにまで交易ネットワークが広がっていった点にも、この時代の交易の特質を見ることができよう。

## 5-2. 商人のネットワークと国家

当時の交易、なかんずく大商人に莫大な富をもたらした遠隔地のインド洋交易の商品は、確かに米などの一般消費向けの商品も重要であったが、近世以降の世界商品と比較すると、やはり支配層・富裕層向けの高額商品・貴重品・奢侈品の比重が際立っていたことは否めない。彼らの主要な顧客はスルターン政府やヒンドゥー王家、およびヒンドゥー寺院勢力であった [Ali 2010: 189–190]。彼らが必要とした商品は馬、象、武器、奴隷、宝石、貴金属、卑金属、香辛料、香木、石材（建築資材）



などであったが、そのほとんどは局地的経済圏で入手することができず、遠隔地交易の対象であった。

スルターンやヒンドゥー王家はそれらの物資の調達を、特定の商人ないし商人集団に依頼していた。たとえば、トゥグルク朝ムハンマドは、大商人に「商人王 (*malik al-tujjār*)」の称号を与え、政府が委託した資金によって馬・奴隷・武器・貴金属などの買い付けをさせている [家島(訳注) 5: 148, 322–323, 417–421]。この称号を与えられた商人は、富裕商人たちの中でも特に信望の厚い大商人や、上述のような政府の必要とする高価な商品の輸入に貢献していた大商人であったようである。

宮廷の委託を受けるこのような大商人は、南インドではアイニユットゥルヴァル (500人組) のようなヒンドゥーの商人ギルド組織に所属していることが多かった。このギルド組織は、デカンから南インドにかけての内陸および沿岸部はもちろん、その活動がスリランカやスマトラにまで及ぶほど、広域にわたって交易ネットワークを張り巡らしており、それゆえにこの組織あるいはそこに所属する商人は、宮廷や寺院にとって欠かすことのできない商品の提供者であった [辛島 2007: 136; Karashima 2009: 199–223]<sup>23)</sup>。興味深い点は、彼らは特定の王家に限定して商品を提供していたわけではなく、王国領域をはるかに超えるその広域のネットワークを利用して——そのような広域ネットワークを持っていなければ宮廷の必要とする商品を供給できない——、一般に幾つもの王家と顧客関係を持っていたことである。これは、彼らの交易ネットワークを支える物資の集散地や内陸ルート of 安全・防衛のために、複数の王家や独立勢力と軍事的保護の約束を取り付ける必要があったからでもある [Ali 2010: 191–192]。いずれにせよ特定の王家の庇護下に入らないという点では、南インドの商人組織は王朝権力から独立した存在であったと言うべきであろう。

そしてこのような複数の王家にまたがる顧客関係および交易ネットワークを背景に、こうした大商人は外交官として活躍することがあった。Maleyāla のギルド組織ウバヤナーナーデーシの筆頭商人であり、ホイサラ朝から栄誉を与えられたクンジャセーッティは、外務大臣 *sandhivighada* のように動いて、北隣のカラチュリ王 (当時チャールキヤ朝から王位を篡奪していた) との「同盟 *sadhānamam*」を実現させたと言われる [Ali 2010: 206–208]。また、11世紀末、コンカン沿岸部の交易を担っている有力商人 (*śreṣṭhin*) が、シラーハーラ朝の外交官 (*mahāsandhivighika*) を務めている事例もある [Chakravarti 1986: 211–212]。同様のケースはトゥグルク朝でも見られ、スルターンから「商人王」の称号を受けた商人が、他国との外交折衝を任されていた [家島(訳注) 5: 148]。彼らは商人仲間の間でおこった問題の処理・仲裁を担った関係商人たちの代表者・保護者であり、またすでに述べたようにスルターンから馬・武器などの輸入を委託されていたことから、彼らが国家領域をはるかに超えた西アジア・中央アジア方面の強固な交易ネットワークをもつ大商人であることは明らかである。

当時の商人およびその組織は、帝国政府を最大の顧客としつつも、それからは独立しており、帝国領をはるかに超える広域のネットワークを持っていた。だからこそ政府の必需品の調達が可能であり、同時に外交上の信頼をも勝ち得たのである。帝国から自立してネットワークを形成しうるそ

の背景には、まちがいなく、広域の移動を支えていた乾燥・半乾燥地帯の活性化(それによるキャラバン交易の発達、内陸ルートの整備、農耕地帯や港市との連結の緊密化)と海域世界の発展がある。この二つが、この時代を彩る様々な交流・交易の底流を成していたと言えよう。

## 6. おわりに——地政学的構造の変化と帝国および交易ネットワークの形成

これまでの論点を、地政学的構造の変化を基点に整理し直しておこう。

中央アジアから延びてくる乾燥帯は、ホマンズが想定するようにデカンまで直接連続しているのではなく、地政学的には、パンジャーブおよびシンドといったインダス川流域が、中央アジア・西アジアとモンスーン南アジアとの境域を構成し、伝統的にそれぞれの帝国勢力の境界を成してきた。

しかし西暦 1000 年ごろからのモンスーンの活発化と温暖化に伴う乾燥・半乾燥地帯の開発・活性化は、それまで辺境とされてきたこれらの地域の地政学的重要性を飛躍的に高めた。その結果、定住農耕地帯に首都を設置するそれまでの国家とは異なり、繁栄する両地域間の交易からの利益確保、定着農耕地帯からの税収確保、乾燥・半乾燥地帯からの軍事的供給(軍馬、軍人など)のために、乾燥・半乾燥地帯と定住農耕地帯との境域に首都を設け、両地域の人・資源のインターフェイスとして機能する新しいタイプの国家建設を南アジア世界に促した<sup>24)</sup>。そうした地政学的構造の変化は、西アジア・中央アジア～北西境域～ラージャスターン・グジャラート～デカンに至る乾燥・半乾燥地帯の連続性をそれまで以上に強化し、遊牧勢力による政治的・経済的進出の動機を高めることになったと思われる。それは、デリーを軸にガンジス川流域穀倉地帯と乾燥・半乾燥地帯とを領域的に覆いつつ中央アジアの遊牧地帯と連結する、巨大なテュルク・イスラームの帝国勢力の出現に結果し(ゴール朝、デリー・スルターン朝)、さらにそのデカンへの拡張の条件を提供した。

その歴史的な画期性には、この動きが、これまで存在しなかった遊牧地帯出身の勢力による非サンスクリットの(ペルシア=イスラーム的)統治文化の導入と、それまで辺境とされてきた乾燥・半乾燥地帯の非定着民の政治的進出とを伴っていたことであり、いずれもグプタ朝以来のサンスクリットの文化が、ペルシア語とヴァナキュラーな地方語の文化に浸食されて大きく変わっていく起点となったと考えられる点である。

今ひとつ、さらに重要な点としては、乾燥・半乾燥地帯と定着農耕地帯との連結は、広大な帝国を形成させ、同時に中央アジアから半乾燥地帯の回廊を通して穀倉地帯や港市に連結する内陸ネットワークを活性化し、その結果、中央ユーラシア内陸交易の大動脈とインド洋交易の大動脈とをスムーズに連結する地域として、アフロ=ユーラシア世界における南アジア世界の政治的・経済的重要性を飛躍的に高めたと考えられる点である。この時代以後長く続く絶え間ないテュルク=モンゴル勢力の侵入や帝国形成は、その政治的現象であろう。

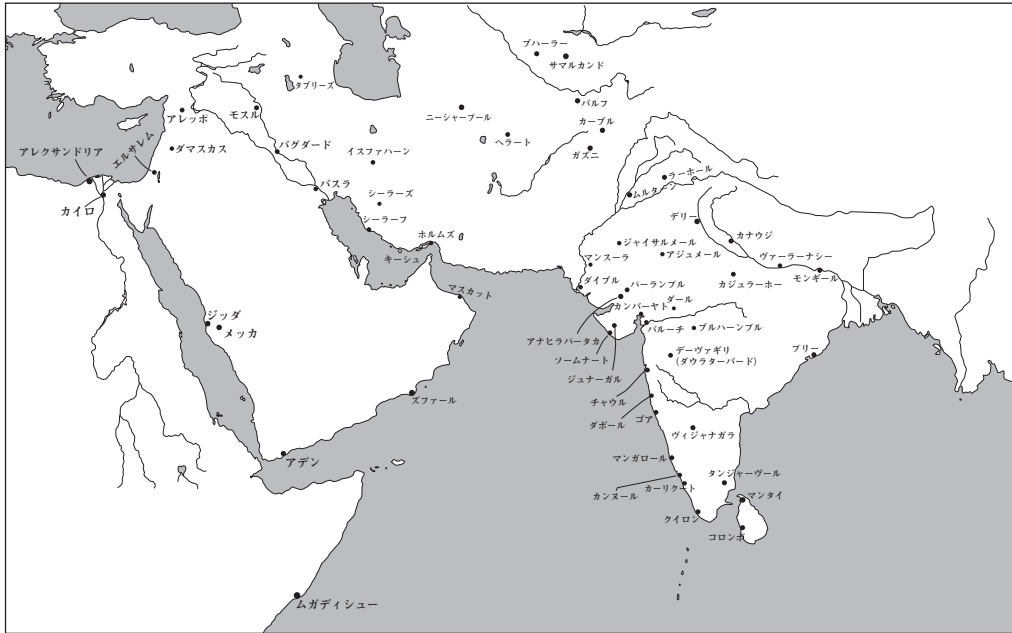
いずれの点も、モンゴル帝国の拡大とアフロ=ユーラシア・レベルの交易の活発化に伴って、ユーラシア世界全体で進行していたプロセス——遊牧勢力の定着農耕地帯への進出、温暖化とモンスー

ンの活発化、陸海の遠隔地交易の発展——と連動した動きと見ることで、はじめてその歴史的な特質が明確になるものである。このことは同時代の他地域との比較研究の重要性を物語ると同時に、それを越えた地域間の接続ないし連動のメカニズムの探求へと誘うものであろう。

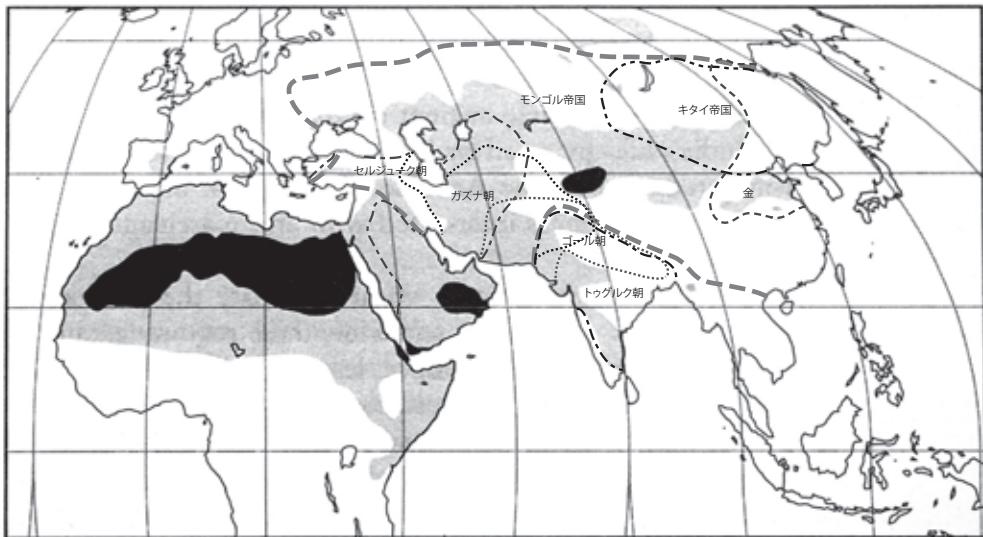
最後にその後の展開について、南アジアに限定した論点ではあるが、現段階での推測を提示しておきたい。モンゴル帝国もトゥグルク帝国も、14世紀半ばに事実上ほぼ同時に瓦解していく。北インドではサイド朝のようにデリー政権が弱体化すると同時に他の地域では地方政権が乱立して再び地域国家を形成していく。他方南インドでは、東南アジアの港市国家の繁栄や鄭和の遠征に見られるように、発展し続けるインド洋交易にも支えられてヴィジャヤナガル王国が16世紀にかけて隆盛を極めていく。その背景には、14世紀以降の地球規模の寒冷期への転換、南アジアではモンスーンの不安定化と降水量の減少が少なからぬ影響を与えていると思われる[Bryson and Swain 1981]。それは乾燥・半乾燥地帯の限界耕地を後退させたはずであり、したがって南アジアの乾燥・半乾燥地帯の陸上輸送に、さらにはモンゴル帝国やトゥグルク帝国の崩壊とともに、中央ユーラシアからデカンに至る陸上交易に、悪影響をもたらした可能性がある<sup>25)</sup>。

しかし乾燥・半乾燥地帯の限界耕地の後退は、決して地政学的構造を西暦1000年以前の状態に戻したわけではない。すでに開発が進み国家形成を経験している以上、かつてのような辺境地帯に単純に戻るはずはなく、厳しい降雨条件の中、13世紀までのような農地拡大ではなく、農地が後退する中で比較的条件的よい農耕地での集約的な発展へとシフトしたと推測される。それは14世紀後半以降、在地に根ざした小規模なザミンダール層が成長してくるなかで、サンスクリット語ではなく地方語やペルシア語を公用語とすることを通して彼らを統合し、新たな地域国家が形成されていったこととも適合する[三田 2007c]。またそれは、デカンなどではワタン体制のような、商品交換を介さず生産物を直接的に再分配する経済システムの形成に結びついていったと思われる。こうしたいわば内向きの社会経済システムの発展と、寒冷化とは関係なく変わらず発展するインド洋交易のようなアフロ＝ユーラシア・レベルの商品交換経済の進展の中で、南アジアは16世紀の「近世」——交易の活況とムガル帝国の時代——を迎えることになるのかもしれない。

地図1：10-14世紀西南アジア地図



地図2：11-14世紀乾燥・半乾燥地帯と遊牧勢力の帝国建設（〔Gommans 2002: 9〕に加筆して作成）



- |       |         |       |        |       |       |
|-------|---------|-------|--------|-------|-------|
| ----- | モンゴル帝国  | ..... | ゴール朝   | ----- | キタイ帝国 |
| ----- | セルジューク朝 | ----- | トゥグルク朝 | ----- | 金     |
| ..... | ガズナ朝    |       |        |       |       |

註

- 1) 本稿では、単なる自然条件やその構造をいう時には「生態環境」「生態的構造」などの言葉を使い、為政者がそうした「生態環境」「生態的構造」を認識しながら、他勢力との関係や各地の資源の把握・分配をどのように行おうとしたのか、という戦略的要素を含んだ空間的構造を問題とする時には、「地政学的」「地政学的構造」という言葉を使っている。
- 2) ガズナ朝はテュルク系とはいえ軍人奴隸マムルークを主体とする国家なので、セルジューク朝のように部族的結合がどこまで重要かは筆者には判断がつかない。そのマムルークへの給与のためにもインドの掠奪が必要であったと考えられている [Eaton 2002: 251]。
- 3) 典型的には、日種族・月種族に繋がる系譜を作成してクシャトリヤを称し、グプタ朝以来の宮廷文化を移植したグルジャラ族などの外来「ラージプート」。フーナ族(エフタル)もインドに残った一族はクシャトリヤないし「ラージプート」とされ、サンスクリット化している [三田 1999: 247]。
- 4) 他方、土着インド人側は、デリー・スルターンをシヴァ神になぞらえて讃えるサンスクリット刻文を刻んでおり、それまでの外来勢力に対するのと同様に、積極的にサンスクリット文化体系の中でその存在を把握しようとしている。これまでと異なったのは、スルターン側がこれを決して受け入れなかった(あるいは無視した)ことである [三田 2007b: 55-56]。
- 5) 中央アジアの遊牧勢力が連続的に南アジアを統治する限界がパンジャーブであり、他方インド側に拠点を置く帝国が連続的に統治する北西の限界もやはりパンジャーブである。両地域に跨がる巨大勢力に近い存在はクシャーナ朝とムガル朝であろう(それぞれパンジャーブのプルシャプラ(ペシャーワル)、ラーホールを帝国の拠点としている)。なお、古代にはこうしたパターンを突き崩す例外が出現しやすかったようで、クシャーナ朝とは逆に、マウリヤ朝はインド側から大きく西アジアへはみ出した。
- 6) ウィンクとホマンズの間には明示的な論争があるわけではないが、後者は常に中央アジアとの連続性を強調する傾向にあり、管見のかぎり、脱遊牧的特質には全く言及していない。
- 7) たとえばイランでは、「サファヴィー朝の前期までは、トルコ系の人々は遊牧生活を送り、主として軍事面で王朝権力と関わっていたのに対して、イラン系の人々は都市や農村に定住し、商業、手工業、農業を営み、そのうちの代表が主として行財政官僚やウラマーとなって政権と関係を持った。」[羽田 2000: 58]
- 8) これら乾燥・半乾燥の辺境地帯は、サンスクリット文化が波及する以前には部族的な「ガナ=サンガ」的政体をとるケースが多く、サンスクリット文化の波及とともにヴァルナ秩序に基づいた王制国家へと移行していったと考えられる [Chattopadhyaya 1994; 三田 2007c]。
- 9) ヴィクラマ暦 1348 年(西暦 1292 年)アナーワダー刻文は、パールハナブラ(パーランブル)の自治組織(パンチャムカナガラ)の構成がわかる貴重な碑文で、そこでは定住商人だけでなく、バンジャラ(vanijyāraka)や船主(nauvittaka)など遠隔地交易に携わる商人・輸送業者も加わっている。Indian Antiquary, XLI, pp. 20-21. 刻文の邦訳と解説は [三田 2005] を参照。
- 10) C. H. Tawney (tr.), *The Prabandhacintāmaṇi*, 2nd Ed., Delhi: A. Sagar Book House, 1991, p. 95.
- 11) ピーカーネールの北西 65kmにある Lunkaransar 湖の調査では、この地の年間降水量は 1200 年頃にピークに達し、その量は現在の 2 倍近かったという試算がなされている [Bryson et al. 1981: 137, Fig. 1]。
- 12) サーマンタ体制はこの時代に初めて出現したのではなく、ハルシャ・ヴァルダナの 7 世紀頃にはすでに成立していた。以降、時代を下るごとにサーマンタ間のヒエラルヒーを発達させつつ、12 世紀頃までにサーマンタ体制の国家統合のシステムを発展させてきた [三田 2007a]。
- 13) サーマンタ体制とこの時代の地政学的構造とが適合的であったことは、サーマンタ体制が発展する以前の古代世界と比較すればわかりやすい。古代世界ではまだ乾燥・半乾燥地帯はほとんど開発が進んでおらず、南アジア世界の地政学的な構造が 11 世紀以降とは大きく異なっており、それに対応して帝国の構造も大きく異なっていた。たとえばマウリヤ朝は広大な領域を維持しながらも、帝国の中核部であるガ



ンジス川上中流域の穀倉地帯は租税徴収を目的に官僚制的に統治し、交易拠点や鉱物資源地などその他の経済的な要衝は属州に編成され、ガンジス川流域に直結する幹線路が敷かれて、各地の富が帝国中枢部に集中するシステムがとられていた [Thapar 1987; 三田 2007c]。この時代には辺境であった乾燥・半乾燥地帯は帝国の経済的関心が薄いために、ほとんど放置されていたと考えられる。経済的要衝を幹線路で結んだ、いわば点と線のこの古代帝国の構造は、定着農耕地帯の圧倒的な経済的・軍事的先進性が可能にした帝国の形であった。それは、定着地帯と乾燥地帯との経済的・軍事的格差が不明になった 11 世紀以降には、もはやあり得ない帝国システムであったと言えよう。

- 14) たとえば、この時代にグジャラートの綿布が大量に中国に輸出されていた [Jackson 1999: 252]。
- 15) 銀が流入する状況であったにもかかわらず、14 世紀前半トゥグルク朝ムハンマドの時には、北インドは銀不足の状況に陥っている。その要因は幾つも想定されようが、おそらく馬をはじめとする西方交易の輸入超過もその一つであったろう。
- 16) イブン=バットウータによれば、トゥグルク朝の時代には駅通制 (バリード) が敷かれており、4 マイルごとに宿駅を配置したスルターン専用の馬の駅通制 (ウラク) と、1/3 マイルごとに宿駅を配置した徒歩による急使の駅通制 (ダーフ) とがあった [家島 (訳注) 4: 279-282]。これは基本的に帝国政府の通信網であったが、駅通制の完備は同時に道路の改善、宿場の整備につながったはずであり、陸路ネットワークの緊密化を伴ったであろうことが推測される。
- 17) 11-13 世紀北インドの地域王権のサンスクリット語刻文史料に頻出する通行税ないし商業税を意味する語。主に商業都市に持ち込まれる商品に対してかけられ、都市ないし市場の入口に設けられた *mandapikā* と呼ばれる徴収所で徴収される。
- 18) 15 世紀グジャラートの文書範例集『レーカパッドティ』には、*deśottāra* (「(特定) 地域の輸送」) と称する通行許可状が 3 例示され、そのうち一つには、ヴィクラマ暦 1288 年 (西暦 1231 年頃) の日付が入っている。とはいえあくまでこれは範例集なので、この文書が 13 世紀のものである保証はない。C. D. Dalal (ed.), *Lekhapaddhati*, Gaekwad's Oriental Series, No. XIX, Baroda: Central Library, p. 8
- 19) それは同時にクイロンンの衰退とマラバルでの中国商人の影響力を後退させたという [Das Gupta 1967: 4-5]。
- 20) 一般にバニヤと称される非ムスリムのグジャラート商人は、ポルトガルがアジアに進出する 16 世紀初頭には西は東アフリカ沿岸部から東はスマトラに至るまで、中核的な港市に拠点を設けてインド洋にまたがる交易を行っていた。トメ・ピレスらの記録によれば彼らは肉食主義者であり、彼らの多くはジャイナ教徒であったようである [Wink 2004: 195-196]。13 世紀以前にも「インド商人」がインド洋各地で交易に従事している証拠はいくつもあるが、いずれも非ムスリムであることを証拠づけるものではない [Jain 1990: 82]。彼らは 14-15 世紀の間に本格的にインド洋各地に進出していったのかもしれない。
- 21) 彼はホージャーだが、現地人ムスリムではなく、ホルムズのムスリム商人である。
- 22) ヴェラーヴァル刻文 (ヒジュラ暦 622 年、ヴィクラマ暦 1320 年、ヴァラビー暦 945 年、シンハ暦 151 年: 西暦 1264 年)。 *Epigraphia Indica*, XXXIV, pp. 141-150。この刻文によれば、当時のソムナートにはすでにムスリムの居住区が存在し、ジャマータと称するムスリムの職業別の団体 (船主・水夫、油売り、石灰職人、車主) がこのモスクの運営の取り決めに参加している。刻文の邦訳と解説は [三田 2005] を参照。
- 23) 12 世紀末スリランカの刻文は、アイニューットゥルヴァルの商人が王に提供する重要な商品として、象と馬を挙げている [辛島 2007: 139-140]。なお、こうした広域に渡るヒンドゥーのギルド組織は、北インドの刻文史料では一般に *deśī* と称されていることが多い [Jain 1990: 41-42]。ただし、この *deśī* がデリー・スルターン朝の御用商人となっていたかどうかはわからない。
- 24) 定着農耕地帯を中核とした古いタイプの帝国システムとして、たとえば注 13 に示したマウリヤ帝国の構造と比較せよ。
- 25) 実際、中央アジアやイラン方面とキャラヴァン交易を行っていたムルタニー商人 (パンジャブのムルタン出身という名称が付いているが、実際にはラージャスターンなどムルタン以外の出身者も多く含ま

れていた)が14世紀初頭の文献に現れているが、興味深いことにその後はしばらく現れず、16・17世紀になって史料に再登場するらしい[Markovits 2007: 129-130]。これはちょうど14世紀以降の寒冷期に起こった飢饉やペストの流行、モンゴル帝国の崩壊、その後の16世紀の交易の活況といったユーラシア規模の動きと相関する現象のように見える。なお、14世紀末にはティムール帝国が中央アジア・西アジアから南アジア方面に向かって広がっており、この帝国とキャラヴァン交易の関係がこの頃の当該地域の陸上交易の実態と深く関わると思われるが、不案内な筆者にはその詳細はわからない。

### 参考文献

- 稲葉稜、2007、「ムスリム諸勢力の南アジア進出」、小谷汪之(編)『世界歴史大系南アジア史2』、山川出版社、63-89頁。
- イブン・バットウータ(著)、イブン・ジュザイイ(編)、家島彦一(訳注)、1996-2002、『大旅行記』、全8巻、平凡社。
- 辛島昇(編)、2004、『南アジア史』、山川出版社。
- 、2007、『世界歴史体系南アジア史3』山川出版社。
- 杉山正明、1997、『世界の歴史9大モンゴルの時代』、中央公論社。
- 田家康、2010、『気候文明史—世界を変えた8万年の攻防』、日本経済新聞出版社。
- 富永智津子、2008、『スワヒリ都市の盛衰』、山川出版社。
- 羽田正、2000、「三つの『イスラーム国家』」、『岩波講座世界歴史14—イスラーム・環インド洋世界』、岩波書店、3-90頁。
- フェイガン、B、2008、『千年前の人類を襲った大温暖化—文明を崩壊させた気候大変動』、河出書房新社。
- 真下裕之、2007、「デリー・スルターン朝の時代」、小谷汪之(編)『世界歴史大系南アジア史2』、山川出版社、102-134頁。
- 三田昌彦、1999、「初期ラージプート集団とその政治システム」、『岩波講座世界歴史6』、岩波書店。
- 、2005、『刻文史料よりみたデリー・サルタナット期北インドの在地社会』、平成13-16年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書。
- 、2007a、「サーマンタ」、山崎元一・小西正捷(編)『世界歴史大系南アジア史1』、山川出版社、215-218頁。
- 、2007b、「南アジア世界における中世的世界の形成」、小谷汪之(編)『世界歴史大系南アジア史2』、山川出版社、25-57頁。
- 、2007c、「南アジア史に見る帝国秩序と王権的分節」、桃木至朗(研究代表者)『近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク』、平成16-18年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、124-147頁。
- 森安孝夫、2007、『シルクロードと唐帝国(興亡の世界史05)』、講談社。

- 家島彦一、1991、『イスラム世界の成立と国際商業』、岩波書店。
- (訳注)、1996-2002、『大旅行記』全8巻、平凡社。
- 、2006、『海域から見た歴史—インド洋と地中海を結ぶ交流史』、名古屋大学出版会。
- 四日市康博(編著)、2008、『モノから見た海域アジア史—モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流』、九州大学出版会。
- Ali, Daud, 2010, “Between Market and Court: The Careers of two Courtier-Merchants in the Twelfth-Century Deccan,” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 53, pp. 185–211.
- Bryson, R. A. and A. M. Swain, 1981, “Holocene Variations of Monsoon Rainfall in Rajasthan,” *Quaternary Research*, 16, pp. 135–145.
- Chakravarti, Ranabir, 1986, “Merchants of Konkan,” *The Indian Economic and Social History Review*, 23, pp. 207–215.
- , 2000, “Nakhudas and Nauvittakas: Ship-Owning Merchants in the West Coast of India (C. AD 1000-1500),” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 43-1, pp. 34–64.
- Chattopadhyaya, B. D., 1990, *Aspects of Rural Settlements and Rural Society in Early Medieval India*, Calcutta: K P Bagchi & Company.
- , 1994, *The Making of Early Medieval India*, New Delhi: Oxford University Press.
- Chaudhuri, K. N., 1990, *Asia before Europe: Economy and Civilization of the Indian Ocean from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Das Gupta, Ashin, 1967, *Malabar in Asian Trade, 1740–1800*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Digby, Simon, 1971, *War-Horse and Elephant in the Delhi Sultanate: A Study of Military Supplies*, Oxford: Orient Monographs.
- Eaton, Richard M., 2002, “Temple Desecration and Indo-Muslim States,” in D. Gilmartin and B.B. Lawrence (eds.), *Beyond Turk and Hindu: Rethinking Religious Identities in Islamicate South Asia*, New Delhi: India Research Press, pp. 246–281.
- Gommans, Jos J. L., 1998, “The Silent Frontier of South Asia, c. A.D. 1100–1800,” *Journal of World History*, IX (1), pp. 1–23.
- , 2002, *Mughal Warfare: Indian Frontiers and High Roads to Empire, 1500–1700*, London: Routledge.
- Jackson, Peter, 1999, *The Delhi Sultanate: A Political and Military History*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Jain, V. K., 1990, *Trade and Traders in Western India (AD 1000–1300)*, New Delhi: Munshiram Manoharlal.
- Karashima, Noboru, 2009, *South Indian Society in Transition: Ancient to Medieval*, New Delhi:

- Oxford University Press.
- Lieberman, Victor, 2003, 2009, *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c. 800–1830*, 2 Vols., Cambridge: Cambridge University Press.
- Markovits, Claude, 2007, “Indian Merchants in Central Asia: The Debate,” in Scott C. Levi (ed.), *India and Central Asia: Commerce and Culture, 1500–1800*, Oxford: Oxford University Press.
- Sheikh, S., 2010, *Forging a Region: Sultans, Traders, and Pilgrims in Gujarat 1200–1500*, New Delhi: Oxford University Press.
- Thapar, Romila, 1987, *The Mauryas Revisited*, Calcutta: Centre for Studies in Social Sciences.
- , 2004, *Somanatha: The Many Voices of a History*, New Delhi: Penguin Books.
- Wink, André, 1990, 1997, 2004, *Al-Hind: The Making of the Indo-Islamic World*, 3 Vols., Leiden: Brill.

本稿は科学研究費補助金の研究成果の一部である。